

## エゾリスが走る

すでに森はすっかり葉を落としていた。太陽の光がまっすぐ林床に差し込んでくる。木々の黒い影は細くすっきりと、落ち葉の上に伸びている。

小さな鳥居に守られるように、ご神木のクリの木が立っていた。そのそばからエゾリスがちよこまかと走り出てきて、何かの実をかじっている。森が動物を育て、その動物が木の実をあちこちに運んで、また森を育ててくれる。この自然を後世に残すために、動物を持ち帰ることは厳に慎みたい。

萩の里自然公園内のセンターハウスを経由して、森の小道を進む。針葉樹はほとんどなく、森の中は明るい。落ち葉の厚いじゅうたんが、体重を柔らかく受け止めてくれる。



カラマツが森の空気を秋色に染めていた

深呼吸の旅 8 ウヨロ川フットパスを歩く

# サケの遡上する川に命のつながりを見る



ツルウメモドキはもっと赤くなる

白老町のウヨロ川フットパスは、萩の里自然公園、ウヨロ川沿い、そしてトラストの森という3つのエリアを結んでいます。雪が少なく、1年を通して歩ける貴重な道を、地元のNPO法人ウヨロ環境トラストの皆さんとともに堪能しました。

文・写真/伊藤哲也 協力/ウヨロ環境トラスト、ホテルいずみ

案内板に従って、公園を出て橋を渡り、高速道路の下をくぐってオーシヤン牧場へ至る。ここには現役を退いた

サケを目当てにオオワシも

道はゆるやかで、多少のアップダウンはあるものの、じつに歩きやすい。枯れたつるの先に、しなびた赤い実が揺れていた。「チョウセンゴミシですね」と新岡幸一さん。漢方薬の材料として、また果実酒に使われることでも、よく知られている。赤い実といえば、ツルウメモドキも青空を背景に実っていた。紅葉が終わっても、赤や黒の実が森のそこそこを飾っている。



フットパスは英国発祥の「歩くことを楽しむための道」。萩の里自然公園のセンターハウスでコースマップや植物、動物の情報を入手してから出発するとよい。☎0144-84-2222



左から、今回ご案内いただいた坂本さん、新岡さん、河野さん。いずれもウヨロ環境トラストのメンバー



エゾリスが一心不乱に木の実を食べていた

馬が、ホロホロ山などの山並みを背に、のんびりと草を食んでいる。牧場の脇の道を歩き、いよいよウヨロ川に沿った道へと入る。

川幅は広いところで15メートルくらいだろうか。川伝いに歩き始めて間もなく、水中に動く姿が見えた。産卵のために遡上してきたサケたちだ。十数匹の群れもいて、たくさんいるように思うが、今年は少ないらしい。例年、身動きできないほど密集するサケのたまり場ができるのだという。

新岡さんは「この冬は、オオワシやオジロワシは大変でしょう」と言う。産卵を終えたサケを目当てに、12月末からここで越冬する猛禽類がいるのだ。岸に打ち上げられ、浅瀬に沈んでいる死体は、春までにきれいに食べられ、鳥のふんとなって森の栄養に戻っていく。その循環にオオワシまで参画しているとは、ウヨロ川も懐が深い。途中、牛の白骨も日に照らされていた。放牧中に動けなくなったものらしい。倒れて1週間でこうなったというから、自然界のスピーディーな仕事ぶりに驚かされる。

30分ほど歩いている間、いくつもの浅瀬でバシバシと泳ぐサケがいた。どうやら、産卵場所はかなり広範囲にわたっているようだ。

カラマツは金色に輝く

川沿いの道はトラックの走る砂利道



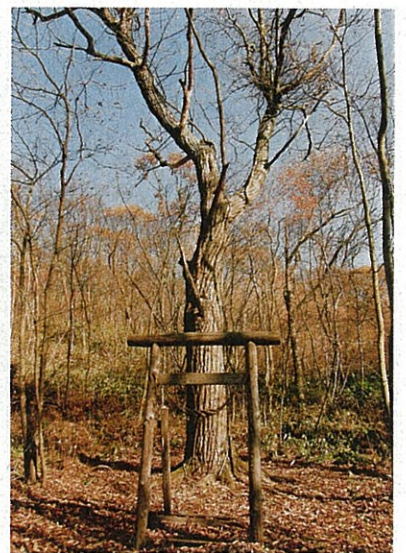
トラストの森に流れる小川



サケが浅瀬を遡上していった



明るい森の道



鳥居の向こうに見えるクリがご神木



イボタノキの実。黒に近い深い青が美しい



白骨化した牛の頭は川沿いにある



チョウセンゴモシは鳥に食べられたのか、数が少なくなっていた



ホオノキの実。赤いタネが一つだけ残っていた



ウヨロ小屋の近くで見つけたムラサキシキブの実。じつに上品な色合い



歩いた後は、ひと汗流しに虎杖浜温泉の「ホテルいずみ」へ。太平洋を眺める露天風呂は、気分爽快。源泉かけ流しの湯は、強いぬめりがあり、肌を心地よく包んでくれる。日帰り入浴 12:00~19:00 大人500円 白老町虎杖浜312-1 ☎0144-87-2621

この連載は偶数号に掲載します。次回は210号(12月25日発売)の予定です。

で遮断されている。その砂利道を少し歩いた後、「トラストの森」へと入る。この森は針葉樹、広葉樹が混在しているようで、萩の里自然公園ほど明るくはないが、晩秋の清冽な空気は格別だ。しばらく歩いてたどりついたのは、森の中の小屋。「ウヨロ小屋」と看板がかかっている。「ウヨロ環境トラストの本拠地です」と、河野功さんが笑った。

なんだか、少年の秘密基地に来たみたいだ。仕事人生を卒業した大人たちが、ここで協力して森の維持を図り、フットパスを作り、自然のすばらしさを伝えようとしている。少し離れたところには、2階建ての家の屋根ほどの高さの立派なテラスもあり、そこで夏にビールを飲んだら、さぞうまいだろうと思われる。

見渡せば、カラマツの葉が見事な金色に染まっている。晩秋の赤と金とは、成熟した人間にもっともよく似合うのかもしれない。